

# 交差する薄い住宅で、視線は好奇心のままに旅をする

高知工科大学 システム工学群 建築・都市デザイン専攻  
吉田研究室 1140032 大森 匠

## 1. 背景

私の暮らしているアパートは機能的、もしくは性能的に十分快適だと感じている。しかし、時々窮屈に感じることがある。それは、ある種の寂しさであったり、苛立ちであったり、性能面とは違うものだ。たとえば、アパートのエレベーターで住人と乗り合わせをした時、その人が何階の住人なのか、性別はどちらか、見た目はどんなだまではなんとなく知ることができる。しかし、どんなことが好きな人なのか、何が嫌いなのか、本当は話しかけてほしいのかは想像することしかできない。結局、自分が変な人だと思われることを恐れて気まずい距離を保ったまま、私と住人は無言のままエレベーターは上へあがってゆく。

## 2. 疑問

私はずっと感じていたが、これはおかしいことではないだろうか。もし、私の隣の人がベランダで小さな菜園をしていて今の時期はトマトが旬なんだよなんて話せる仲だったら、きっと私はベランダから聞こえる音を不快に感じることはないだろう。私は、あまりにもお互いを知らなすぎるがためにどの部屋から聞こえているかもわからない歌声や物音に不快感を抱き、エレベーターで乗り合わせた時に気まずい時間を過ごさなくてはいけないのではないかと疑問に思った。しかし、一方でずかずかと踏み込んでほしくないとも思う。そこで、卒業設計では適度な干渉があり、住人同士がコミュニケーションを取れる集合住宅を設計したいと考えた。

## 3. 敷地の選定



水路に沿って小道があり、住宅のうらを見て歩く事ができる。利用している人はほとんどいない。



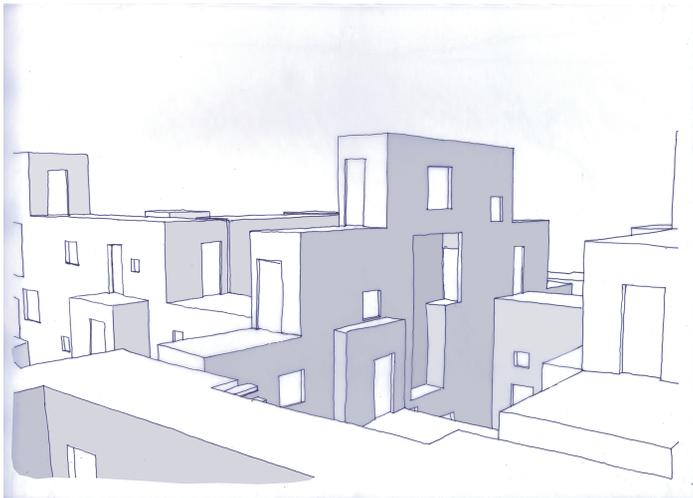
住宅街を横切る大きな水路。階段から下に降りることができる。使用している人はいないが珍しい景色に魅力を感じた。



住宅は高い密度で密集しており、2階から3階建ての住宅が大半で、平屋建ての住宅は少なかった。

## 4. 計画

住人同士でコミュニケーションをとるための仕掛けとして、窓をその人の情報発信装置とする。趣味やコレクション、インテリアなどを外に公開する。窓の位置や大きさに差をつけることで窓が持つ情報発信力に振れ幅が生まれることを利用して緩やかにプライバシーを持たせている。また、外階段や梯子を用いた導線により、建物の複雑な形が変化して見える。住居だけでなく、レストランや本屋、オフィスなど様々な施設が住居と混在している。



## 5. コンセプト

住宅を薄く、長い壁のような形にする。その住宅を格子状に並べる。少し角度を持たせる。

向かい合った薄い住宅は、窓を通じて様々な物語を語り始める。

視点が移動するごとに、窓が切り取る景色は変わり、複雑に重なる建物の形や上下に続く導線に心を躍らせ、私の視線は気ままに旅を始める。





20m

10m

5m

1FL plan

